

も不幸であることをしみじみ体験した。現在私は、平和な日々を感謝しながら生きている。苦労を重ねた長い長い過ぎし日々を追想した。

終戦後の出来事

静岡県 曾根 碩 二

昭和二十年八月、終戦の日から旬日を過ぎた或る日、華北交通（株）天津鉄路局で管理していた北寧公園内の池のほとりの芦原で私と同じ天津站到勤していた内田と村松の二人が何者かと争った後殺された事件があった。

北寧公園も他の施設と同様、日本が敗戦した後は中国政府の管理に移されたのだけれども実際は無に等しいもので中国人、日本人の別なく池の鯉を釣りに行っていた模様で彼等も釣りに行つての出来事である。

私は昭和十二年七月天津東站が八路軍に襲撃された時救援の為満鉄大石橋駅から出張で来てそのまま華北交通へ在勤となったもので構内副站长としては最古参者であっ

た関係で二人の火葬、葬式は主になつて行つたが永い間の戦争相手の国の国内で戦勝国民として指導してきた日本人に対する感情は悪いのが当然だろう、此の時中国人からは勿論日本人同胞からも嘗てない嫌な思いを受けた。亡くなつた二人の遺体と両家の家族を数人の職員に手伝つてもらいトラックに載せて郊外の火葬場へ行く、辻々に立っている中国人巡警の検問に止められ、その都度幾ばくかの金銭を渡さなければ通してくれない、お寺さんも宗派が云々と言つて仲々返事をもらえない、三拝九拝して西本願寺へお願いして葬式も済ますことが出来た。

此の事件があつてから日本領事館警察の宮崎刑事が毎日駅へ聞き込みに来て私も問われる事については誠意をもって答えていた、然し数日後の十七時頃「もう少し詳しく聞きたいことがあるから本署まで来て下さい」と云い構内主任も「ご苦勞だが頼むよ」と云うことで領事館まで刑事と雑談しながら歩いた。

さて、領事館へ着き警察署の取調べ室へ入ると他の刑事が片手に剣道の竹刀を持って来て、いきなり「もう調べはついているんだ南貨廠で盗難に会つた綿布を買つた

金の山分け話の纏れでお前が支那人を使って内田と村松を殺させたではないか、支那人も曾根副站长は天津站で一番古い助役でどんなことでもお前が知らないことはない筈だと云っている」と云うのである。

私は「そんな事に私が関っているわけが無い、私が何でも知っている」と云うのは仕事上のことで昨年の会社創立記念日には十六万社員の中から優秀社員として表彰され私は誇りをもっています」と答えれば彼は「それは敗戦前のことだ、お前でなければ誰がやったんだ、白状するまでは帰さない」と留置場へ入れられてしまった。

そして一日おいて三日目に取調べ室へ呼び出されて「どうだお前も白状せよ、隣の部屋には横山副主任が来ているが横山はお前とやったと言っているではないか、お前の家の押入れからその時使った支那靴が出たではないか」と有ろう筈のない事を云って誘導尋問である。

横山様は大連生れでほんとうにさっぱりとした人で竹を割ったような性格の人物で盗みや殺人に関わるような人ではないし、私の家に一足の支那靴も有ろう筈もない、私ははっきりと其の旨を答え又誰がやったかなど全く見

当もつかない、早く家へ帰して欲しいと云ったがまた留置場へ返された。

その頃、巷間では内地への引揚げの話が出始めていたので社宅に居る妻と三歳の娘のことが大いに気になっていた、何で此の時期にこんな仕打ちを受けなければならぬのだ、殺された二人も時を弁えて自重して釣などに行かなければよかったのに、と出歩いた二人を怨んだりもした。

そして又一日おいて呼び出され「白状せんか」とその日は比較的やさしく「引揚げも近いだろうから帰ってよろしい」と無罪放免になった。

今なら名誉毀損も甚だしいものだが当時は出歩くことも出来ず帰国したい一心だったしそんな手続きが出来る世の中でもなかった。

それから数日後、中支作戦で鄭州へ天津站から派遣していた中里、坂元の両君が「終戦で帰って来ましたがどうしたら良いですか」と私の社宅へ来た、一と月もかかったとのことでひどい身なりである。早速風呂を沸し肌着など与えて着替えさせ沢山の洗濯物は妻の仕事である、

六畳間へ客布団を敷いて彼等に寛いでもらった、翌日居留民団へ一緒に行き彼等の帰国について相談したが住む家の無い人は優先帰国の手続きを執ると云うことで帰国まで一と月位だったろうか我が家へおいてやり出発日には握り飯を持たせてやった。

勿論どこからの援助も無くささやかな我家の遣り繰りだから充分のことは出来なかったがその後彼等から何の沙汰もない。

国連軍が天津へ進駐して来たのは九月末か十月になつてからだったろうか、丁度その日駅から打切賞与を渡すから受け取りに来るように通知があったので近くの社宅の堀川君と二人で行き三千何がしかの金を貰い庶務室を出ようとした矢先黒人の兵隊が来て銃をつきつけホールドアップをさせられて今貰ったばかりの金は勿論、持っていた財布、ウォルサム銀側懐中時計、万年筆等持ち物は全部剥奪された上ジープで伊太利租界に止めてあった既に日本人が大勢乗せられているトラックに乗せられ市中を走り廻り暗くなって海光寺兵営へ一泊させられた。

又昆緯路の大和日本小学校へ米軍が駐留するようになった。

それから私達の社宅も情況が悪化、暴民が罵声を揚げて投石や入口の門扉を揺ることが多くなり煉瓦塀の上に電流鉄條網を備え交代で夜警をした、然し昼間堂々と中国人巡捕が二、三人で来てあれこれと要求しラジオ、ポータブル蓄音機、時計、人形、果ては家具什器まで持ち去るようになった。

十二月二十六日に集結命令が来て嘗て妻が帯を解いて造った二つのリュクサックへ三人分の必需品を入れて握り飯を持って近所の皆様とトラックで特三区の陸軍貨物廠に収容された、広大な倉庫の土間に藁を敷いた上に布団を敷いての起居、食事は支給してくれるが狭くて非衛生の中で船を待った、年も改り一月五日所持品検査を受ける、その際中国人が没収しようとした妻の着物を米兵が戻してくれる一幕もあって漸く塘沽港からLSTへ乗る、船の中は狭く身動きも出来ない程で甲板上の便所はドラム缶を切っただけのもので凍結している上船は揺れる見栄も外聞もない。

漸く佐世保に着き荷物は責任をもって宿舎に届けるから身体だけでトラックへ乗るように指導があり此れに従っ

だが妻のリュックだけが講堂へ着いていない、夜締切りまで、翌日も探したが無く、トラックで輸送途中で落したのだと云う人、何も持たないで来た人が盗んだのだと云う人もいた、故郷へ帰る足は重かったが私の実家では妻には嫂の着物を娘には子供の物を買って当座を凌いだ。

満州引揚者の体験

宮城県 佐々木 賢 二

私は稲作地帯としては一戸当たりの平均反別二町三反(昭和初期のころ)という宮城県遠田郡南郷村(現在町)字大得尻という水田単作の農家に生まれた。小学校五年生のころ、当時の大文学者といわれた香川豊彦先生の「乳と蜜の流れる里」というお話を聞き、自分も将来はどこか広い外国に行き蜜蜂を飼ひ、乳牛を飼育して人間としても自然に生きることこそ人生の最大の幸せであると考えようになった。

昭和六年、高等小学校を卒業したが、十人兄弟の六男

だったため昔は農家では徴兵検査までは生家を手伝う習わしだった。昭和十年ごろ満州移民の話が急速に持ち上がり、最初はブラジルを目標したがある筋の人から満州行きを進められ、結局満州の廣い耕地なら夢の実現も可能と考え、昭和十一年十月、一か月の渡満のための訓練を受けて、翌十二年二月南郷村分村という形で渡満、第五次武装移民として東滿総省密山県里台移民団(後開拓団と変更)に入殖した。

現地はソ連の国境まで七、八キロという特殊地帯で駅はトーチカ式になっており、住民は全部居住証明書を持ち、これがなければスパイと見なされ列車にも乗ることも出来ない地帯であった。私は最初二年ほど本部勤務をしたが、農業をやるべく渡満してきたのであるから部落に帰り、十町歩の畑と一町歩の水田(遠方のため朝鮮人に小作をさせた)を、前年結婚した妻と満人一人を雇い入れ、北海道式の寒地農業を始めた。馬も北海道より導入、昭和十四年これも北海道より乳牛を導入、その外ソ連産の乳牛等も購入して、冬期間は伐採、營農方面も主穀主義経営から軍に納入の野菜二町歩ぐらい作った。そ